

キェルケゴールにおける美的実存

佐々木 徹

Die ästhetische Existenz bei Kierkegaard

Tohru SASAKI

1

美的実存とは、日常性からの絶えまなき逃避である。日常性のなかに埋没している世間一般の生活は、この逃避がいかに困難で一種の天才を要するかについて知ろうとはしない。〈美〉というそれ自体で完結した目的論は、それと抵触する日常の些事を徹底して排斥する。食事をとっていながら今朝何を食べたかまるで記憶にないような顔をし、ましてや今晚食べる魚の値段や公害汚染度などに関知してはならず、服装を選ぶにも流行に絶えず気をつけ、しかもそれにとらわれていることの片鱗も見せてはならず、服装と同じようにしょっちゅう取り替える恋人も、そのつと脱ぎ捨てたらいっさい振り返ってはならず——すべてこういった振舞いが食後の煙草を手取るように自然に行なえること。これが美的実存の条件である。いや、さらにもうひとつ根本的な条件がある。自分の生き方が、食後の煙草のように人生の真髄であると信じ、健康のため禁煙をしようなどという〈健全な〉人生観を前にしても決して揺らがないことである。美的実存は、このように自分のすべてを〈美〉のために没げ出していて、世のいとなみとは程遠いところに漂っている。その消息はすでにプラターテンの詩に美しくうたわれている。

美しきもの見し人は
はや死の手にぞわたされつ
世のいそしみにかなはねば
されど死を見てふるふべし
美しきもの見し人は

(生田春月訳)

美しく生きるために不断に日常性の手から逃れようとする努力は、どこか努力という言葉で覆いきれないものを底にもっていて、それはその人の宿命とひとつである。「美しきもの見し人」はすでに見てしまったのであって、見ない昔に還ることはできない。しかもその人が努力して見ようとした結果ではなく、美はいわば彼に襲いかかったのである。「世のいそしみ」にかなわなくなった責めを、ひとり彼のみに帰することもできないであろう。

キェルケゴールは『あれか・これか』の初めに詩人をこう定義している。「詩人とは何か。それは不幸な人間、胸深く苦悩を秘めながらも、ためいきや叫びがその唇を洩れると直ちにそれが美しい音楽を奏でるような人間である。」

ここで不幸が、秘められた苦悩について言われているのではないことは注意されていい。秘められた苦悩も不幸にはちがいないが、それは巷のどこにでも転がっている不幸である。どんなに日常生活に忙しい人間でもそれなりに、自分には苦しみがあると言うだろう。そしてその苦しみを隠しているのだと訴えるだろう。しかし、隠さなくてすむ苦悩はもともと苦悩ではなく、苦悩といわれるかぎりはみな秘められているのである。秘められた苦悩はそのことにおいてみだされているとも言える。また、時あってそれが外に洩れた場合、他

者はその苦悩そのものに手は届かないながら、理解や同情を示してくれるであろう。したがって、秘められた苦悩そのものは不幸だとは言えない。キェルケゴールはそういった普遍的な不幸ではなく、きわめて特殊な詩人の不幸について語っているのである。つまり、隠された苦悩が絶対に外に洩れることを禁じられた人間、苦しみを訴えて嘆けば嘆くほど、それが美しい音楽となる者の不幸である。

美しい調べが聞く人の心を慰めることはあっても、その源の苦悩は決して理解してもらえないから、詩人は不幸なのであろうか。詩人の不幸はそこにとどまらない。詩人が苦悩のあまり洩らした言葉は、美しい響きをもつ。その美しさに酔うのは詩人みずからでもある。詩人は自己の苦悩に美という形でかわる。美しい調べは他者を慰めると同時に詩人自身を慰める。ここに関係は二重奏となる。苦悩と詩は互いに美しく響きあう。詩にとって感情を波立たせる苦悩は不可欠の条件である。詩人は苦悩を欲しなければならない。それも苦しむためではなく酔い痴れるために。かくて苦悩は不治となる。甘美な夢から目醒めさせるのは不可能に近い。この意味で詩人は誰よりも不幸な存在である。

詩人という美的実存を不幸と見る立場は、しかし美的実存の外にある。それは批評家の立場であって、彼はあくまでも論理的整合に心を配り、苦悩＝美→不幸という図式を導き出す。そういった図式を導き出せる者はおそらく不幸ではない。論理という足場を失って中空に漂っている者こそ美的実存である。美という原理は、現実的な意味で原理とはなりえない危うさをばらんでいる。世の中のさまざまな営みが実感をもって迫らないほど、美は彼を遠くまで連れ去る。連れ去るところは、いわば永遠の彼方である。彼方は無限に彼方を生み、終りを知らない。憧れはつぎつぎに憧れの手をのばす。それは不断の動揺であり不安である。確たる目的に達することなく、音楽のように時間のなかでいつか虚無へと消えてゆく。過ぎ去るということこそ、美の著しい性格である。美は瞬間に宿る。その瞬間はたしかに体験されたのだが、現在のどこを見渡しても見当らず、やむなく眼は過去に向けられる。過去への憧れ。未来へ無限にのびるはずの時間は過去と結びつき、そこで閉じられ、無限の運動をむなしく繰り返す。美しきもの見し人に、未来の創造的建設はない。彼に成熟はない。すでに早や彼は「死の手」のなかに委ねられている。

美は批評を拒む。生きているものはすべて批評という論理を嫌う。そこに実存がある。美的実存と言われる場合、その生き方の根本が美に支えられており、それ以外の原理は美の前にすべて色褪せてしまう。あるいはすべてを美のもとにたぐりよせる。苦しみも悲しみも美である。とすれば、批評もまた美の形に組み入れられないはずがないので、より進んだ美的実存は同時に明晰な論理性を備えている。先きに美的実存は批評を知らないからみずからを不幸と見ることはないと言った。しかし、みずからの在り方を不幸と見なしてもなお美的実存は成り立つ。その不幸の意識を美的に自己のなかへ取りこむのである。悲哀こそ人生——この人生観は裡にふるえるほどの享楽を秘めている。

日常性からの絶えまなき逃避は、このような美の誘惑なしには起りえない。逃避はその意味でもはや逃避ではない。日常性に墮すことこそ、彼にとっては非本来的である。切り捨てた日常生活のさまざまな幸福が、彼を根源的に衝き動かすことはない。彼は正しい意味での悔いを知らない。後悔することはあっても、それもまた欠かすことのできない美的要件であるので、根本的に自己の生き方を悔い改める結果とはならないのである。美的実存はあらゆるものを、いわば＜美の相の下に＞見る。美が唯一の価値基準である。ふつうわれわれは美を絶対化しないで、まず程々のところで折りあっている。美が唯一絶対となる生き方は、先きののべたように、ひとつの宿命である。何事でも徹底するためには、努力だけでなく天分が必要とされる。キェルケゴールのなかに鋭い美的感受性があったことは言うまでもないが、同時に彼のなかに明敏な批評家がいて、絶えず美的実存を糾弾し、しかもそのために美はますます研ぎ澄まされ、さらに批評の論理も深まるという弁証法的な構造をもっていた。＜あれか・これか＞は決着を迫る問いであるが、その問いは自己がひとつの絶対にあつかるまで確答を得ることはなく、おそらくキェルケゴール自身も終生その問いに最終的な答えを出すことはためらった。そのためらいをもって、たとえば後期の宗教的著作も書いたところに、キェルケゴールの＜実存＞があり、そのあらわれとしての偽名の意味もあると私には思われる。

2

〈あれか・これか〉という選択は、人間の自由を示すとともに人間の不自由を表わす。どちらを選ぶことも人間の手中にあるのだが、どちらか一方しか選べないということは自由ではない。選択をしないわけにはゆかないのである。結婚をしても後悔するし、結婚をしなくても後悔する。結婚するかしないかの二つに一つしかないのだが、いずれにしても後悔する。世間を軽蔑しても後悔、世間におもねっても後悔、いずれにしても帰するところは後悔である。自殺をしても悔いが残るし、自殺を思いとどまっても悔いが残り、所詮生きても死んでも悔いを免れることはない。……キェルケゴールはこのように二者択一の壮麗な羅列を悔いという一つの原則で難き倒す。これこそ人生知の極意である。この原則は選択以前にあって、永遠の相の下にある。そこから出発するということもないような、そんな原則だが、しかしそれは、そこから出発するということと相対しているのではなく、出発する・出発しない以前の原則である。なぜなら、もしその原則から出発すればやはり後悔するであろうし、出発しなければしないでまた後悔するであろうから。キェルケゴールのこういった論理展開はあらゆる選択という運動にストップをかけ、その静止状態においてひとつの絶対を得るのだが、すべてを静止させる魔法の杖は、この場合〈後悔〉である。魔法と言ったのは論理を超えているからで、悔いも選択に先立つ、いわば絶対的な悔いである。

では、なぜ〈悔い〉なのであろうか。なぜ後悔が絶対なのであろうか。選択に先立つ悔いは自己のなかに所与としてあるのでなければならぬ。自己の在り方がすでに悔いと結びついている。何を選んでも、何をしてもむなししいという意識は、自己の存在そのもののむなしさとひとつである。キェルケゴールは『あれか・これか』第一部の「輪作」では〈退屈〉という原則ですべてを解明している。神々は退屈のあまり人間を創り、アダムはひとりで退屈したのでイヴが創られ、今度はアダムとイヴの二人が退屈して子供たちを創り、さらにはアダムとイヴとカインとアベルが家族そろって退屈し、加速度的に増す人間が爾來退屈の種を世界中に蒔き散らして現在にいたる。ここでは、先きの後悔の場合とちがって、人間が積極的に行動してゆく原理が説明されているが、その行動のゆきつくところもまた退屈以外の何ものでもなく、結局は、何をしても悔いという思想と結びつく。退屈も悔いも先験的に認識されており、そういった意味での原則である。

すべての人間は退屈である。「ああ退屈だ」というとき、退屈という言葉が二つの範疇をさし示す。みずから退屈している人間と他人を退屈させる人間。キェルケゴールによれば、みずから退屈を自覚している人間は選ばれた者であり、大部分の者は退屈を自覚しない。そして、退屈を自覚している者は往々にして他を楽しませるが、みずから退屈しない類いの人間はたいてい、この世の中のことに何やかやと忙しく、際限もなくお喋りをつづけ、それゆえ最も退屈な、耐えがたい人間である。

さて、人は退屈のあまり結婚したり離婚したり、塔を建てたり壊したり、議会を召集したり解散したりする。退屈は諸悪の根源である。であるならば、退屈は乗り越えられなければならない。退屈を克服する法は、しかしあるのだろうか。キェルケゴールはそれに答えて「人生を享受すべし」と言う。この答えは、退屈を克服するためには退屈しなければいいと言うのに似ているが、その享樂にはひとつの方法が示されていて、それは〈輪作〉と呼ばれる。輪作とはもともと農作の仕方であるが、これには二つの方法が考えられる。第一は耕作地をつぎからつぎへと替えてゆくことである。街がいやになれば田舎で暮らし、田舎がいやになれば外国へ渡る。外国の地を転々とした挙句、ついには星から星への旅に出かける。この輪作には果てしがない。いわば悪しき無限である。輪作の第二の法は、同じ土地のなかでいろいろと工夫をすることで、その享樂は外へは拡がらず内に集約される。幼児の頃のように制約された環境のなかにあっても、幼児の頃のように何ものにも驚嘆する眼をもつこと——これが秘訣である。自分の外のあるものから別のものへ移ってゆく輪作の根本には、つねにその対象を美的に享樂する自己が新しく用意されていなければならない。こういった自己の在り方は、むろん時間ということと切り離せない。あらゆるものが時間のなかで退屈へと堕ちてゆく、その落下を一瞬一瞬受けとめ直す自己が必要である。退屈を乗り越えるためには退屈をしないようにするしかないという答えが、より深い意味をもって浮かびあがる。自己の変革である。自己の変革は時間の変

革にはかならない。時間を時間として成り立たせないためには、瞬間に生きる以外にない。先きにものべた通り、美は瞬間に宿る。

ふつうわれわれにとって、時間はあまりに早く過ぎ去るか、あるいはまた、なかなか過ぎ去らないといった形を取る。しあわせな時間はあっという間に過ぎ去り、苦痛の時は遅々として進まない。人間の不幸はすべて時間のなかにある。忘れたくないことはいつしか時間の彼方へ消え去り、忘れたくないことがいつまでも時間のなかにのさばる。時間にたいする人間の処し方は忘却と回想だが、美的実存はこの二つを自由自在に使いこなす術を会得していなければならない。忘れたくないことはすでに忘れてしまっていて、もはやそれは回想のなかにしか存しないかのように、また忘れたくないことはすでにもう回想のなかにあるという形で現前しているかのように、身を処するのである。このようにして、忘却と回想は双方から歩みより、そしてひとつに重なってしまう。忘却と回想の重なるところは瞬間である。美的実存は瞬間において不断にみたされており、退屈も後悔も知らない。

瞬間を美しく生きるためには、時間を連続させ固定するような関係をもってはならない。時間の連続と固定は、友達・結婚・職業といった関係によってもたらされる。自己を他とかかわらせることは自由を失うことを意味する。美的実存は能うかぎり何ものからも自由でなければならず、唯一の自由な関係すなわち瞬間の関係だけをもつことがゆるされる。一瞬一瞬のふれあいだけが美を無傷のままで保持するからである。友達・結婚・職業といった永続的な関係を避けるべきであるのもこの理由からであって、先きにあげた結婚しなくても後悔するという〈あれは・これか〉の一つを選んだのではない。ここでは全く選択をしていないか、あるいはまた、後悔しない選択をしているのであって、極論すればいま急に思い立って誰かと結婚し一分後に別れてもいいのである。輪作は自己自身を絶えまなく変えることを教える。瞬間を瞬間として成り立たせるためには、自己のなかに持続があってもならず、自己は自己自身の恣意にすべてを任せ切る。ゆきずりの人と出会い、途中から芝居を見、音楽の第二楽章を聴く。こういった勝手気儘は、時間的連続の上に組み立てられた確かな存在感を突き崩し、その偶然の一瞬にきらめく美を完全に、ということはその瞬間だけにおいて、享受するのである。

このように、美的実存はあらゆる具体的な選択以前に〈美〉を選んでしまっている。美という在り方において自己自身を選び規定しているのである。それゆえに〈美的実存〉なのである。しかし美もまた、ある二者択一のうちの選択ではなかったか。とすればそこにもまたある種の悔いの生じることがありはしないか。キェルケゴールはさらに進んで、美的実存と倫理的実存の〈あれか・これか〉について考察する。

3

倫理的実存の立場から美的実存は以下のように解明される。

美的実存は人生を享受すべしと言うが、享受の条件はその人の外にある。たとえその人自身のなかにあったとしても、それはその人の意志で左右されるものではない。享受しようということは才能であり、天分であるのだから。したがって、たいていの場合、人生を享受すべしという美的命題は完遂しがたい条件下にある。美的実存は具体的な形では渴望となる。もし条件さうまく整っていたら、私は幸福を手に入れることができるのだが——こういった慨嘆となる。しかしながら、たとえば皇帝ネロのようにあらゆる権力が備わっていたとしても、美的実存が全うされることはない。世界全体がネロの快樂の手段に供されるが、快樂から快樂へと飛び移るネロの本質は憂鬱であり不安である。ネロは自己自身を所有しておらず、自己自身のなかで自由ではない。ローマの街を焼いても、ネロの渴望はいやますばかりである。人間の不幸は外的条件によって決定されるのではなく、その人自身の在り方によるのである。

ネロの場合は享樂の仕方がまちがっていたのだと反論されるかもしれない。美的実存は、すでにのべたように、自己のなかで完結すべきものであった。ネロは自己自身との関係における享受を知らなかったのである。と。しかし、自己自身を享受すべしという反省された美的実存もやはりひとつの条件に支配されていることは否めない。その条件は享受しなければならないということである。自己自身は享樂のなかでとらえら

れていて、享楽しない自己は捨てられる。ということは、いくら自己自身を享受せよと命じても、享楽自体に手は届かないということである。享楽そのものが条件として外から与えられていて、そのなかで自己自身を享受するにとどまるのである。

自己自身を享受せよという美的実存がさらに徹底すると、いわば極限の美的実存の立場があらわれる。美的な在り方そのものがむなしいという自覚をもった美的実存である。この世の中のものはすべて儚くむなしい。自己自身を享受すると言っても、その享受自体のむなしさがすでに意識されている。それにもかかわらず、いやそれゆえにこそ、そのむなしさに美的にもたれかかる。自分の外に美的対象を求める美的実存は、その対象が時間のなかにあって変化するものである以上、絶望にいたることは必至であるが、最後の美的実存はすでに絶望をわがものとしている。いわば絶望を先取りしながら、刹那刹那の美に身を、委ねるともなく委ねているのである。この美的実存は、美的とは言いながらも明晰な論理をあわせ持っていて、理論的にはこの世界を説明しつくしている。すべては過ぎ去る、すべては無常である。それほどにもきっぱりと世界を片づけながら、しかしこの世界を断念することはできない。この世の中の快を追い求めてみたされない者の不満・渴望は卒業しているが、絶えざる不満、絶対的な不満のなかにある。それは自己の在り方を美的実存として選んでいるからである。

キェルケゴールによれば、いろんな対象のなかから美的に選ぶといった意味での選択は、本来の選択ではない。さまざまな種類の対象がただ与えられているだけであるから、そのうちの一つを選んでも、すぐまたつぎの瞬間には別のものを選んでさしつかえない。美的選択は倫理によって規定されてはいないのである。しかし本来選択は倫理と切り離せないものである。＜あれか・これか＞は美と倫理の間の選択であり、美を選んだものは、無差別の多様性が与えられるばかりで、善悪という絶対的な選択の前に立つことはない。それゆえに、美を選んだものは正しい意味での選択を回避しているわけだが、いったん倫理的なものにふれたのち美的なものを選ぶ在り方は、非倫理的という形でありながらやはり倫理の規定の下にある。美的実存はすでに見たように絶望であったが、倫理的に規定するとそれは罪である。

本来の意味での選択は、単なる対象間の選択ではなく、自己の在り方を選ぶことである。そして美を選んだ者は選択を回避するといった形で選択をしたのであり、倫理を選んだ者は善悪の前に立って善を選択しなければならない。究極的な選択・善悪の選択に直面して、人は初めて厳密な意味での選択を行なうのだが、その選択は善を前提としている。倫理的なものは、人間が成るところのものへ成らしめるといった契機を含んでいる。その根本には善が絶対的に選ばれていて、それは義務としてあらわれる。義務は自己の自己自身にたいする関係のなかにある。真に倫理的な実存は、義務を自己の外にではなく自己の内にもっている。

選択とは自己自身を選ぶことであるが、それは絶対的な選択でなければならない。絶対的に自己自身を選ぶことでなければならない。もともと自己は唯一絶対であり、きわめて具体的な存在である。その自己を絶対的に選ぶとはどういうことか。それは倫理的実存としてみずからを規定し選ぶこと、つまり善における自己を選ぶことであって、ひいては神という絶対との関係において選ぶことである。もとより人間の実存が神と直結して絶対的なものとなることはありえない。人間の神にたいする関係は、人間の側から言えば、悔いであり罪の自覚であり、さらには悔い改めと祈りである。しかしそのように自己を選ぶことによって、自己は絶対的なものとなるのである。

キェルケゴールによれば、選択は弁証法的な動きをする。選ばれるものは選択によって初めて成立するのだが、同時にもともと存在していなかったのであれば選択は不可能である。自己は私の選択によって成立するのだが、私は選択以前から存在していたものであって、私は私自身を創造したのではない。自己が自己自身を倫理的なものとして選ぶとき、初めて自己は永遠との関係において絶対的な自己自身を得る。自己は自己自身を選ぶとともに、自己自身を措定するものを選ぶ。先きにのべたように、義務は自己のなかにあるが、その義務は自己の絶対的自由と絶対的依存との交点である。自己内部での自己自身とのかかわりという意味では全くの自由だが、その自己は倫理的なものとして絶対的に選ばれているのだから、善への絶対依存をもつ。自己自身を絶対的に選ぶことによって、選択以前から存在していた絶対的な善がそこで初めて絶対的なものとして現成する。選択の決断において、自己は初めて本来の自己自身となり、倫理も神という絶対との

関係の上にリアルなものとなる。この選択を避ける在り方は、意識するとしないとにかかわらず、すべて自己自身の外に自己の存在条件をもっており、したがって絶望である。

倫理の実存は自己自身のうちにその目的論をもつと言っても、それは美的実存が自己完結的であるという意味とは本質的に異なる。倫理の実存はきわめて具体的であって、自己は自己以外のものとかかわることを通して自己自身になるのである。世界を否定し、世界から抽象された意味での自己目的ではない。倫理の実存の目的論は、自己から出発し世界とかかわりつつ本来の自己自身へ還るといった運動をもつ。その運動は自由の行為であって〈現実〉は初めてそこに具体的に成り立つ。これに比べて、美的実存の目的論は静止しており、自己以外のものとの具体的ななかかわりはもたれない。芸術作品に顕著のように、美はそれ自体で完結しているが、そういった在り方を選択する美的実存は、孤立した自己で終始し、彼には正しい意味での〈世界〉も〈歴史〉も存在しない。美的実存に持続はなく、ただ瞬間があるのみである。倫理の実存にして初めて生きるということの意味・確かさが得られ、さらには美も与えられるのである。この世界のなかで出会う一つ一つの存在を、その個別性におけると同時に普遍的なものとして見るとき、すなわちそれらを絶対的なものとして見るとき、あらゆるものはそれ独自の美を帯びる。美的実存が世界の果てまで尋ねて行って得られなかった美が、いたるところで出会われる。美的実存が忌避した友達や結婚や職業を通して、生きてかかわる小さな出来事のすべてを通して、倫理の実存はそのものに即した美を見出すのである。

4

さて、キェルケゴールは『あれか・これか』の刊行者であるヴィクトル・エレミタの言葉を通して、美的人生観と倫理的人生観は対立しあったままで、最終的な結着はつかないと語る。美的実存か倫理の実存かは、すでに見たようにそれぞれ絶対の立場で主張され、激しく決断を迫る問いであるが、少なくとも『あれか・これか』を書いた当時のキェルケゴールは簡単に断を下していない。しかしながら、書物の構成からは、倫理の実存が美的実存のつぎにのべられている関係上、倫理の実存の立場が結論であるかのようにも受け取られる。キェルケゴールの思想の展開から見れば、倫理の実存はいったん挫折し、より高次の形で信仰のなかに回復されてくるものとなる。このように美的実存は倫理の実存へ、倫理の実存は宗教的実存（厳密に言えばキリスト者）へと包摂され高められてゆくのだが、そういった段階的発展の図式はキェルケゴールの思想を簡明にとらえるものではあるけれども、それとともにキェルケゴールのもつ生きたものが脱落するおそれもある。美的段階、倫理的段階という言葉を使わずに、美的実存、倫理の実存という言葉を使ってきたのもそのためである。

もちろん、美的実存という実体、倫理の実存という確固不動の生き方があるというのではない。〈実存〉という言葉のなかには動きが含まれる。根本的な自己の選択が、美という絶対的なものによってなされるとき、それを美的実存と呼ぶのであり、倫理の実存も善という絶対においてまたしかりである。絶対とかかわりながらも生きて動いているところが実存の眼目である。その不断に動いているところから選択の可能性も出てくるので、〈あれか・これか〉は一瞬一瞬間いの刃を私に向けてくる。それを避けることはできない。しかも、それは簡単にどちらかに結着をつけることを阻むような形で決断を迫るのである。このジレンマに立ちつづけることもまた、実存のひとつの意味である。

先きに、美的実存は直接性の立場であるが、それが同時に反省の契機を含むこともあるということをものべた。その究極は、美的実存は絶望であることを自覚しつつもそこにとどまるという在り方であった。自分の立場が貫徹できないことを、美的要素として組みこむ、それは最後の美的実存であった。その場合、美的実存は倫理的なものにかかわっているからこそ、みずからの絶望を知っているのだとも言えるだろう。しかし、倫理的なものはあくまでも美的に知られているのみであって、絶望という形で倫理的なものにふれても、それは絶えず倫理的なものを倫理的なものではなくするという結果になる。したがって、美的なものが全体を絶対的に占め、倫理は正しい意味で選ばれることはなく、それゆえに存在しないと言っていい。ところで、倫理の実存が美を含みうることも先きにのべた通りである。その場合の美は、もちろん美的実存のいう美で

はなく倫理にしたがった美しさであるが、とにかくそれは美と呼ばれている。ここで論理は片手落ちをしてはいけけないので、以上の所論は二通りの帰結に導くことが可能である。まず、倫理の実存が美を含むといっても、それはやはり倫理的に知られるかぎりの美であり、倫理と衝突する美は美として成り立たない。ということは、倫理の実存は美を美ではなくするといった形で美を取り入れているということである。そうではなく、倫理の実存は美を生かしうるという立場に固執するならば、同様に美的実存もまた倫理を生かしうると言わなければならない。なぜなら、倫理と衝突しない美も存在するからである。このように、美的実存と倫理の実存は互いに歩み寄って一部重なりあうか、あるいは相互に全く排斥しあうかであって、論理的にはいずれとも決しがたいのである。

問題は、しかし論理にあるのではない。美的実存か倫理の実存かは、生きた主体の決断を迫る問いである。論理的に一方が他方を打ち破ったとしても、自由な主体は必ずしもその結果にしたがわなくてもいい。自己は自己自身に全き自由においてかわる。その自由なかわり方が美に傾くか倫理に傾くかは、自己のいわば宿命を思わせる。「美しきもの見し人」は意志的に美を見ようとして見たのではないだろう。見ざるをえないといった形ですでに見てしまったのである。しかし同時に、美はその人の何よりも欲するところであったことも否定できない。その人の自由意志の根本が深く規定されているのである。その宿命から逃れることはほとんど不可能に近い。美は、キェルケゴールも言うように、直接性である。理性や精神の媒介なしに直接的に知られうる。反省的となった美的実存でさえ、その反省の帰着するところが美であるかぎり、直接性の立場を離れてはいない。美が直接性であるということは、自己の意志がもはや意志とすら自覚されないほど密接に自己自身とひとつになっているということである。それをおいて自己というものは考えられず、美はいわば存在条件である。自己の存在そのものに美は深く射込まれているので、その矢を引き抜けば直ちに存在も崩壊してしまうと思われる。それほどにも自己の存在とひとつになっている美が、しかし絶えまない渇きの源である。美は存在の奥深く突き刺さっているのだが、それは同時に自己の手の届かない、はるか彼方にある。永久にそれが手に入らないという意味では美はつねに不在である。「美しきもの見し人」は過去にまごうことなく美を見たはずであるが、そのすでに見てしまったという意識は、新たに訪れる美をもはや美として成り立たせない。こころは激しく求めているのだが、出会うものすべてが、こんなものではなかった、もっと熾烈なもっとめくるめくものであったという反省とともに見捨てられる。美的実存にとっては、美の瞬間こそが生であるが、それは不断に欠如の形でしか与えられない。

この世で一番不幸な人の墓というものがあつたが、それを掘ってみると中は空虚であつたという話を、キェルケゴールは書いている。最も不幸な人間とは、死が救いとならない者のことである。この世界にも死の世界にも安らうところが見出せない。彼は永遠にさまよう運命の下にある。あらゆるものに退屈し、あらゆるものにむなしさを感じ、それでいて死という救いも拒まれたまま、彼はさすらいつづける。キェルケゴールによれば、絶望は死にいたる病いである。死病にとりつかれ、この世の営みはかなわないながら、しかも本当に死に切ることでもできず、いわば絶えず死を死につつ、苦しみつづける在り方。不幸と悲惨はここに極まる。

美的実存は絶望である。そして絶望であるかぎり救いはない。あるいは美を通してしか救いはない。〈あれか・これか〉という問いは、美的実存においてのみすぐれて問題となる。倫理の実存にはもはや選択の余地はない。ためらうことなく倫理を取ればいいのである。その本質が美的に規定されている人間、先きの言葉でいえば、美が存在条件となっている者にとってこそ、〈あれか・これか〉は緊張した問いになる。彼には美しかない。それにもかかわらず、美か倫理かの問いが突きつけられる。美は死にいたり倫理は生にいたる道だが、そのいずれを身をもって選ぶのか。〈あれか・これか〉は容赦なく決断を迫る。しかし美的実存は、あくまでも〈美〉を選ぶであろう。〈あれか・これか〉の緊迫した二者択一のなかで、つねに美を選ぶつづけるであろう。たとえ死にいたる道であろうとも、自己が自己自身に〈誠実〉である生き方を選ぶであろう。その選択において、彼もまた望ましいと思う日常生活のさまざまな幸福を振り捨てながら、美に殉じる者の孤独な道を歩きつづけるであろう。

美しきもの見し人は
はや死の手にぞわたされつ
世のいそしみにかなはねば
されど死を見てふるふべし
美しきもの見し人は

死の手に渡された美的実存が、そのふるえにおいてまだ生きている、いや誰よりも生きているといった次元は決してひらかれないのであろうか。
(’73. 8. 11. 脱稿)